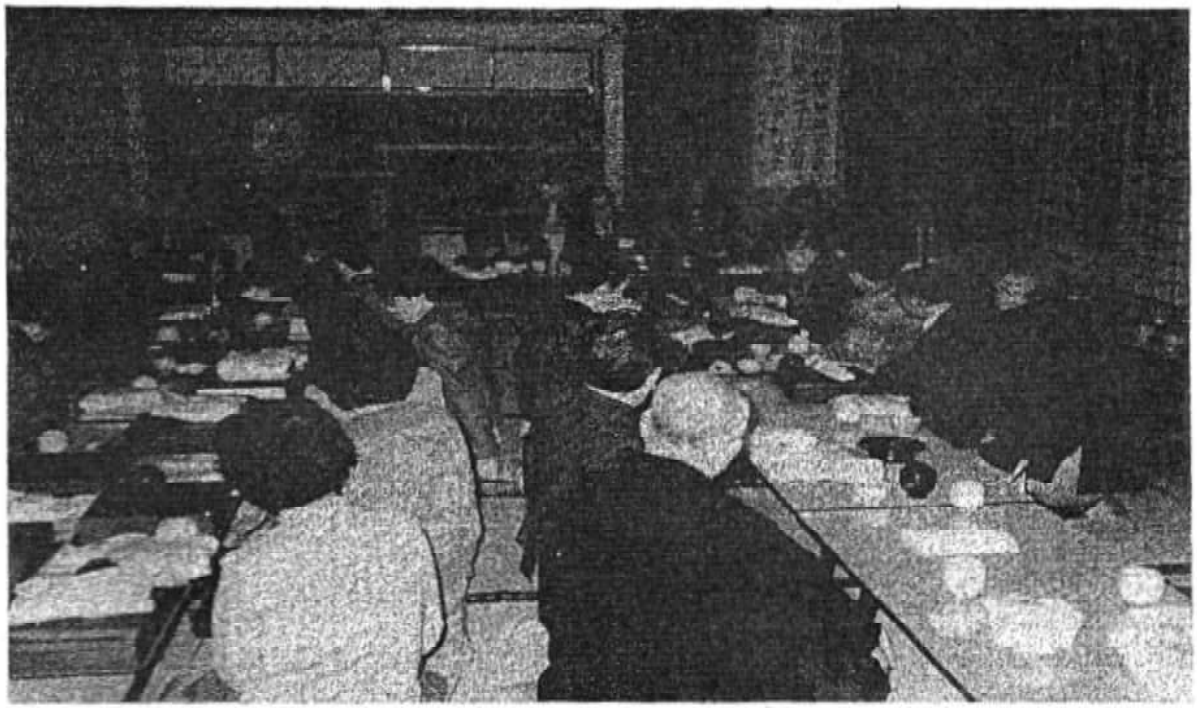
河上肇記念会報

NO. 25

1987・2・10



目次

年頭所感……杉原四郎(1)
『全集』以後(一)……杉原四郎(3)
新刊紹介……(5)
河上肇資料整理余話……米浜泰英(6)
安井功さんを偲ぶ会……塩田庄兵衛(18)
一九八六年総会記……紀平龍雄(21)
編集後記……(22)
生誕一一〇年記念事業アンケート……(23)
一九八六年収支報告……(24)

年頭所感

河上肇記念会世話人代表
杉原四郎

昨年は没後四〇年と全集の完結とが重なって、それを記念する行事が各地で行われ、私たちの会としても思い出の多い一年であった。いまそれらを想起しつつ、この一年の成果を今後の発展にどうつなげてゆくかを考えている。

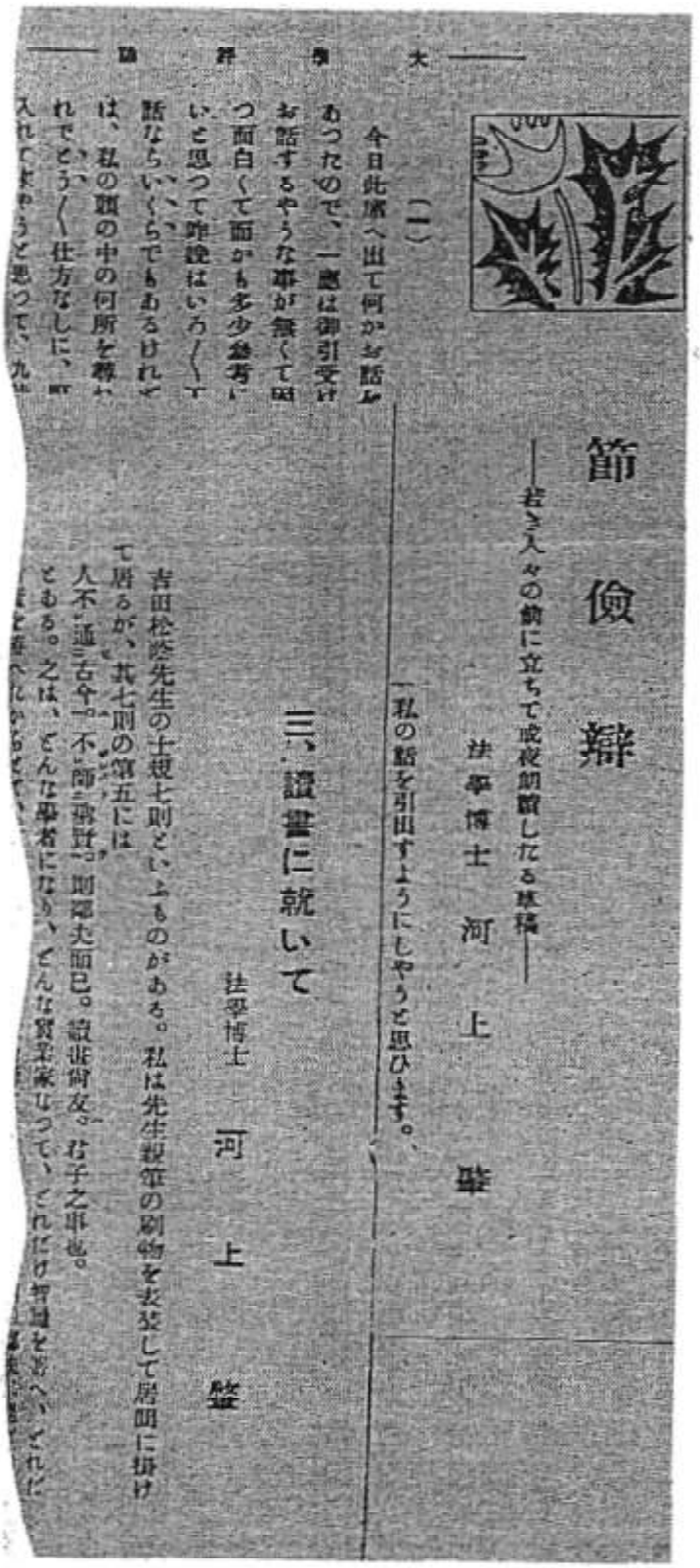
今度岩波文庫に『河上肇評論集』が入ることになり、その編集作業をやりつつある。岩波文庫にはすでに夏目漱石、與謝野晶子、吉野作造、石橋湛山らの評論集が出ており、いま大杉栄の評論集が編集中で、河上肇の場合もこうしたジャンルの一つとして刊行されるわけである。

たしかに河上肇は、若い時から、専門家の集団である学界むけの文章だけでなく、幅広い読者を対象とした新聞や雑誌にも好んで執筆している。そしてこのことは、彼が京大の講師に就任してアカデミシャンとしての道を歩み出してからも変りはない。その点で彼は生来評論家としての資質を持っていたといっていいだろう。

河上の書いている評論は、彼の専門に関係のある社会・経済評論が多いのは当然だが、その他に教育評論とも名づけうる種類のものもかなり書いている。次の「『全集』以後」で紹介した文章もその一つであるが、農民教育、女子教育、中等教育、小学校の教育などを論じたものの他、直接学生たちに読書の心がまえを説いたいくつかの文章も書いている。これらは河上が教育について強い関心を持っていたことを示しているが、教育を重視することは、とりもなおさず青少年を重視することである。そして河上は、社会・経済に関する評論を書く場合でも、青少年にも読んでもらい、彼らにもわかってもらうことを心がけて筆をとっている。『貧乏物語』を読めばそのことはよくわかる。そのことに彼が努力したからこそ『貧乏物語』はあれだけ多くの青年の心を強くとらえることができたのである。

新人類とよばれる当今の青年は河上の文章を読むだろうか。読んだとしてもその真意を理解することができるだろうか。それはなかなかむずかしいことである。だが何らかのきっかけで彼らが河上の文章に接し、多少の努力を払ってそれを読んだなら、彼らはその中から心にふれるものをくみ出す力をもっている。河上肇の文章には、新人類の心をさえつかむ力をもっている。私は昨年度関西大学で河上肇をテーマとする特殊講義を担当し、その試験答案をよんでそうした確信と希望を持つことができた。

その確信をさらに強くし、その希望を一層ふくらませるために、私は河上肇と日本の若い世代とを結びつけるパイプをつくることにつとめたい。そうした思いをこめて、『河上肇評論集』を編んでいるのだが、この記念会の今後の活動も、会員諸氏の御協力をえて、青少年を大切にする河上肇の遺志を生かすべく、若い世代への積極的な働きかけに重点の一つをおくようにしてゆきたいと思う。



節儉辯

——若き人々の前に立ちて或夜朗讀したる草稿——

法學博士　河上肇

「私の話を引出すようにしやうと思ひます。」

（一）

今日此處へ出て何かお話あつたので、一應は御引受けお話するやうな事が無くて面つ面白くて面かも多少參考いと思つて昨晩はいろ〳〵話ならいくらでもあるけれどは、私の頭の中の何所を尋ねれでどう〳〵仕方なしに、

大學講演

三、讀書に就いて

法學博士　河上肇

吉田松陰先生の士規七則といふものがある。私は先生親筆の刷物を表装して居間に掛けて居るが、其七則の第五には

人不讀書古今不師賢則鄙夫面已。說非尚友。君子之事也。

とある。之は、どんな學者になり、どんな賢者になつて、どれだけ智識を蓄へ、どれだ

『全集』以後(一)

杉原四郎

はしがき

これからこの会報で『河上肇全集』の完結（一九八六年五月）以後に明らかになった新資料について紹介してゆくことにしょう。河上肇の著作や手紙類が中心となるが、彼の消息に関する未知の事実をつたえる情報や、注目すべき河上研究文献などもとりあげたいと思う。会員各位からの御協力・御教示をお願いする次第である。

一

まず河上肇の著作について。全集編集後の調査で、「教育者の社会的待遇」という文章が、『大阪朝日新聞』の一九一六（大正五）年一月三日号にのっていることがわかった。これは『全集』第八巻に収録されるべきものであった。約一二〇〇字の短文ながら、河上の教育に対する熱意をしめすものとして、興味深い文章である。

河上は先ず、人間にとって大切なものは身体や頭脳よりも魂だとのべ、次の時代の国民に望むことは「其魂の据わらん事」だといった後、本題の学校教育の問題に入り、彼が今の学校教育が知育に偏して徳育をないがしろにしていることに「不平」があり、冒頭にのべた点にかんがみて「心の教育が何事よりも最も有効に行はれん事を希望する」と書いている。

つぎに彼は、国民の次代を背負う若者の魂の教育というこの重大な責任を委託されている教育家を国民がもっと尊敬し、その事業を援助すべきであると主張する。その尊敬は個人的のみならず社会的にもなされるべきであり、しかもそれは必ずしも俸給を増すという意味でなく、たとえば村の新年宴会で小学校の校長が郡長や村長より上位にすわるという意味であるとする。そして最近彼がある学校の図書館の落成式に参列した時、校長より郡長がさきに式辞を読んだことをみて「聊か奇怪に感じた」

といい、「権力金力崇拝の傾向益々盛ならんとするに當って、……教育者の社会的待遇を一変せん事を切に希望する」とのべて、最後に、小・中学の教員に向ってつぎのように呼びかけている。もし「公開の席上に於いて諸君に席を譲るの郡長あり知事あらば、私は諸君が、身親ら教育勅語の御趣意を実現するの聖職に在ることを自覚して、願はくば我国の教育の為に、敢て無用の謙遜を為さず、堂々一座の正面に着席されん事を希望する」。

二

つぎに書簡について。全集最終巻の月報36に一九一九（大正八）年一二月二五日づけの末川庄橘あて書簡がのっているが、それ以降つぎの二通の手紙が明らかになった。一つは一九一三（大正二）年七月二五日づけの吉長正好にあてたもので、この手紙のことは一九八六年五月二四日づけの『朝日新聞』に「若き河上肇の姿ほうふつ、学生の疑問答える手紙、価値論やさしく、七三年目に発見」という見出しで大きく報道された。私も当日大阪で開かれた没後四〇年の記念講演会でこの手紙のことを紹介した。その内容は前号の会報にのっているので参照されたい。なおこの手紙は当時関西大学の学生であった吉長正好の御遺族から関大の図書館に寄託されている。

昨年十一月に公刊された『関西大学百年史、通史編』上巻には、「教育者としての河上の誠実な人柄と当時の学生の熱心さがよくわかる」としてこの手紙のことが紹介されている（三〇〇ページ）が、この『百年史』には当時の河上の関大とのかかわりについて、つぎのような事実ものっている。一九一二（明治四五）年五月一日商業科学生の第一回討論会が開かれた。テーマは河上肇が出題した「マルサス人口論当否」で、河上と他二名の講師が審査にあたり、受賞の学生を決定した（三〇五ページ）。河上が当時マルサスの人口論の研究に没頭していたことを思いあわせると、この出題もさこそとうなずける。また同年十一月五日学友会主催の秋季講演会が大阪中之島公会堂で開かれ、三名が講演したが、河上は三番目に演壇に立った。演題は「矛盾と調和」であった（三〇七ページ）。河上は同じテーマでその年の四月に那覇で講演している（要旨は全集第五巻に収録）ので、内容もおそらくその時とほぼ同様ではなかったかと思われる。

もう一つは一九三八（昭和一三）年一月十五日づけの塩屋喜三郎（山口県岩国町本町）へあてた封書である。これは河上荘吾氏が発見されたもので、荘吾氏の母（左京の夫人）益子の実家の喜三郎（益子の兄）への病気見

舞で、同年同日づけの河上左京あての手紙に「本町の兄上御重態の趣、只今お見舞状を不取敢差上げておきました」（全集第二六巻一二四ページ）とあるその手紙である。墨書で十一行のもの、河上の住所は東京市杉並区天沼一ノ二二九である。秀夫人は一九三六年十一月五日に中野区相生町からここに転居した。鈴木重蔵・芳子の新居の隣家である。一九三七年六月一五日に出獄した河上はこの天沼の宅に帰ったのである。なおこの書簡は現在岩国市の図書館にある。

〔新刊紹介〕

"荒川堤草萌える"

一海知義編「河上肇獄中往復書簡集 上」

岩波書店　一九八六年一二月

昨年暮入手した本書は、表紙カバーに河上の独房スケッチがあり、なんとなく明るくユーモラスを感じさせる本であり、表紙タイトルの一〇文字もデザインとしておさまっている。しかし一言、本としてのタイトルには固苦しい感じがする。下巻をまって、きちんとした紹介がなされることを望んでいますが、一読の価値あり、と宣伝しようとここに読後感を書かしていただきます。

タイトル通り本書は、獄中の河上肇と妻や娘たち、肉親縁者、すなわち「河上一家」ととりかわした通信である。五十余年を経過してもこれらの書簡が実にまとまって残されていることは驚きであり、しかも獄中獄外通信という特殊条件とは言え、当時の一家の生活情況が実によく表現されていることも驚きである。そこで示された「河上一家」相互の深い理解と愛情を私は感知させられた。

昭和八年一月河上は検挙される、五四歳。私は同年同月に生まれ、現在五四歳である。私はここで自問する。特殊条件を除いても私の一家がかくも深い理解と愛情をもって存在しているであろうか。「家族崩壊」、「権威の喪失」という今日的キー・ワードをまつまでもなく、余りにも急速に生活様式、そして生活感覚が変ってしまっている。それはいつの頃かと自問してみるのも本書一読の価値ではないだろうか。願わくば妻と相聞歌を再び、とは私のみか。

（H生）

（定価三二〇〇円。岩波書店へ直接お求めの方は送料三〇〇円をプラスして営業部へ。下巻三月十一日刊）

〔総会講演〕

河上肇資料整理余話

米浜泰英

全集が発刊します前の年、一九八一年のこの総会にまいりまして、この場で一言ごあいさつをさせていただきました。あれから早くも五年たちましたが、今年の五月二〇日に最後の巻が出て、全36巻を無事完結することができました。河上記念会の皆様方には、ほんとうに長い間にわたって様々のご協力や激励を賜わりました。この場をお借りして心からあつくお礼申し上げます。

今度の全集のために集めたり、いろいろの方からご提供いただきました資料はかなりの量になります。暇をみてはその残務整理をはじめておりますが、そのなかに新聞・雑誌の記事があります。これは、今度の全集に収録した河上の執筆になるものを除いて、そのほか一切の河上に関係する記事を集めたものです。

新聞だけとってみましても明治から今日までのものとなりますと相当の量になります。これを古いものから順にスクラップブックに貼りつけていっておりますが、目にとまる記事がありますと、つい読み始めたりしますので実のところなかなかはかどりません。本日は、辛うじて貼り終えました明治と大正のところを持参しておりますので、それをみながら全集の編集作業の過程で気が付きましたことを二、三申し添えて報告にかえさせていただきたいと存じます。したがって、整然とした報告などにはとてもなりませんことを予じめお断り申し上げておきます。

ところで、新聞記事につきましては、河上が晩年自叙伝を書く時に用いた二冊のスクラップブックが現存しております。その一つは「野文卑調」と題された、主に明治時代の新聞の切抜ですが、これは肇の父忠（すなお）が息子の書いたもの、息子に関する記事を切抜いてとっておかれた、それを父の死後肇が貰いうけて自分でスクラップブック

に貼って整理した、というものです。

この切抜のなかには、彼の若い時期の著作が多いのですが、そのなかには、これに貼られてなかったら恐らく捜し出して全集に入れることなどできなかったであろうと思われますものが何点もございます。

もうひとつは「波の跡」と題されたものですが、こちらは昭和三年四月に京大を辞職した時からはじまって、五年二月の総選挙に新労農党から立候補した時迄の新聞記事がスクラップされています。このなかで特に貴重だと思われますのは、昭和四年に新労農党を結成し、そのプロパガンダと地方選挙応援のために九州各地や新潟・金沢など各地方へ遊説に出掛けていますが、その行った先々の地方新聞に載った記事がスクラップされています。これらの地方新聞は今日ではなかなか容易にはみられませんし、河上の記者とのインタビューがかなりの数入っています。

このスクラップブックは一体誰が蒐集し整理したものかわかりませんが、題字の「波の跡」は明らかに河上の筆跡です。

私はいま全集課に所属していますが、ほかのいろいろな個人全集の話をきいていますと、河上肇の場合は、よく資料が残っている方ではないかと思います。ただこの場合、本人が几帳面にとっておいたというよりも、むしろ周囲の方々が大切に保存してとられた、という感じがいたします。先程申し上げました岩国の父のところへは、河上は若い時から、自分の書いたもの、自分に関する記事は、どんな小さなものであろうと送っていました。父は必ずそれを読んだ上で大切に保存し、時にはそれをもとに息子の著作目録をつくったりしています。その後岩国の家をついだ弟の左京、そして現在の荘吾さんに至るまで、河上に関係したものは、何一つ処分することなく今日まで大切に保存されてきています。

また、昭和五年一月、河上が京都から東京に移転した時、京大時代の書籍や講義ノートはほとんど二本松の家に残して行きました。それらは後をつがれた羽村さんによって、今日まで完璧に保存されてきました。上京後の河上は数回転居をしていますので、これらのものが本人と共に東京に行ってしまっていたら、むしろなくなってしまった可能性の方が強いのではないかとすら思います。

このように周囲にいらっしゃった家族の方々によって、河上関係の資料は大切に保存されてきました。今度十二月に出します『河上肇獄中往復書簡集』を編集していま

すと、河上が獄中で自己の学問的信念を貫き通した背後には、家族の方々の献身的な努力や温かい励ましがあったのだということを痛感させられます。それは河上に関するものはどんなものであれ大切にして今日まで保存されてきた、ということと全く同じところから出ているように私には思われます。

一　「特志の大学生」

前おきが長くなりましたが、新聞の切抜のなかで一番最初にきますのは、明治34年12月23日の毎日新聞に載った「特志の大学生」という記事です。このとき河上二二歳、大学四年の年です。実はこの記事のなかには「河上肇」という名は一度も登場しませんが、さきほどのスクラップブック「野文卑調」のなかに切り抜きが入っていますために、自叙伝の「木下尚江翁」のなかに全文引用されており河上の若い頃のエピソードとしてたいへん有名になっております。この記事の内容はくわしくご紹介するまでもないと思いますので簡単に申上げますが、当時足尾鉱毒事件が大きな社会問題となっているなかで、この年鉱毒地救済婦人会という組織が結成されまして、それの主催する演説会を聴きに行った河上は、感激して着ていた外套や羽織を寄付し、翌日また自分のもっている衣類一切を婦人会の事務局に届けた、この話が毎日新聞に記事となって出たという次第です。

足尾鉱毒問題を報道した当時の各新聞の論調、記事の取扱い方といったものを詳細に比較分析した本が最近出ましたが（山本武利著『公害報道の原点』御茶の水書房）、これをみます「特志の大学生」の記事が載った当時の新聞界の情況というものがたいへんよくわかります。毎日新聞は、島田三郎、木下尚江というコンビで論陣を張っていますが、足尾鉱毒問題に関しては、この年（明治34年）の半ば以降、従来の中立的立場から一挙に被災民側に立ち、政府及び古河攻撃の急先鋒にかわっていったようです。そして12月10日の田中正造直訴事件以降は、紙面を大々的に足尾鉱毒問題に割くようになり、そうした盛り上りのなかで、12月23日の「特志の大学生」は報道されたといえます。

自叙伝にも引用されています木下尚江の「帝国大学と私」（『改造』昭和12年12月）をみますと、木下自身が演説会での河上の衣類提供の現場に居合わせており、また翌日河上から衣類が届けられたとき、その名前の確認などにも立ち合ったように書かれています。そして三五年以上経った後にもそれを鮮明に記憶して書いていると

ころをみますと、「特志の大学生」の記事は、もしかして木下自身の筆になるものかもしれないと思われもします。

ところで、この事件は衣類の提供をうけた事務局の人たちも、もしや精神に異常のある人ではないかと疑ったように、第三者にはアブノーマルな行動とうつったのですが、自叙伝によれば、本人にとってはこれこそ自分の精神史の発端をなす思想的事件であったというわけです。

彼は逮捕から二年近くたった昭和九年の末頃、自分の辿ってきた生涯を、今日の自分を形成した精神史として書いてみようと思いたちます。それがいちばん最初に表明されるのは、次女芳子に宛てた次の手紙ではないかと思います。

「私はかうして自分で筆を執ることの出来る間に、一応私のこれまでの生涯について物語をして置きたくなりました。……私の一生を特徴づけてゐる私の心の特殊な働きです。」（昭和9年12月2日付）

獄中で与えられるわずか一枚の便箋のなかで、彼は極めて簡潔に過去を回想していますが、それによりますと、東京に出てから始めてバイブルを繙いたこと、「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。……なんぢに請ふ者に与へ、借らんとする者を拒むな」という句が、彼をして「異常な」行動に奮起せしめた。そしてその最初の行動が、救済演説会で衣類を提供したことだ、と言っています。もうひとつは無我愛運動だと言ってますが、これはまたあとで触れさせていただきます。

衣類寄付事件は、ここでは、河上の精神史のなかで彼のパーソナリティがはじめて発現した事件として位置ずけられています。そしてこのことは、後の自叙伝においてそっくり同じ形でひき継がれています。「思ひ出・断篇の部」のなかの「大死一番」にはこんなふうに書かれています。

「沢山の罹災民がこの厳冬を凌ぐべき衣類とてもなしに鉱毒地を彷徨しているかの強い印象を受けた。と同時に、私の耳は「なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな」といふ、はっきりした声を聞いた。私は躊躇するところなく、差当り必要なもの以外は一切残らず寄附しようと決心した。」（続⑦192頁）

獄中で自分のメンタル・ヒストリーを書こうと思い立った河上は、後にそれを自叙伝のなかでかなりの程度実現しています。

しかし、この衣類寄付の一件にしましても、現代の公

害問題から遡って足尾鉱毒や田中正造に光が当てられてきている今日的な問題関心からしますと、河上が公害問題をどのように考えたか、というようなことがまず気になってまいります。あるいはまた、持てる衣類一切を寄付してしまうほどの「過激な」行動をとりながら、その後は公害問題にはなにも関与しなかったのかどうか、とか、あるいは被災民が可哀相だという衝動的な同情以外に、この事件を社会問題として、彼の専攻する経済学の問題として捉えることをしなかったのかどうか、等々といった疑問がわいてきます。

しかし、こういうことについて自叙伝はなにも語ってくれていません。自叙伝を執筆した段階では、この衣類寄付の事件はバイブルの命題が自分に行動をとらせた、という内面的な出来事として語る関心しか、河上にはなかったのではないかと思います。逆に言えば、こうしたところにも、河上の強烈な自我意識というものが表われているように思います。

年譜をつくる作業をしていますと、こうしたことが気になりまして、全集や関連資料を気をつけてみていましたが、さきほどのような疑問に直接こたえてくれるような資料はなかなか見つかりません。これまでのところ、わずかに一つ書簡集のなかに後日の行動を思わせる手掛りらしきものが見つかっていますので、それをご紹介します。

それは、明治43年6月27日付の金子正道宛の手紙ですが、そのなかで次のように書いています。

「仰せ越しの事共自身に於いては凡て忘却仕居候が只だ渡良瀬沿岸旅行中の事をさすがに記憶仕居候」（㉔342頁）

これは文面からしますと、二年後輩で学生時代に一緒に行動を共にしたと思われる金子が往時を回想した手紙を河上に書いたようで、それに対する返事の一節です。ここで言っている「渡良瀬沿岸旅行」は、明らかに鉱毒地の現地視察のことを指していると思われます。

田中正造全集に付された年表とか、さきの『公害報道の原点』の巻末の付録をみますと、河上が聴いた演説会から一週間後の12月27日に、東京の学生千百余名が大挙して鉱毒地視察に行っております。また年が明けた明治35年1月25日には、帝国大学生徒有志による鉱毒被害視察が行なわれています。河上はおそらくこのいずれかの団に加わって、鉱毒地の視察旅行に行った可能性が高いのではないかと思われます。そして明治四三年の時点で

は、彼はほかのなににもましてそれをはっきり記憶していたわけです。

また、さきの年表類によりますと、暮れの12月30日には被害地を視察した学生の報告会が開かれ、「学生鉱毒救済会」が設立されています。この会は元旦に路傍演説会をもちますが、1月13日にはさらに木下尚江らをよんで演説会を開催しています。そして、帝国大学生が現地視察をした翌日の1月26日に、政府はついに学生の鉱毒視察を禁止します。

こうした運動のなかに河上が加わっていなかったかどうか、ちょっと興味がもたれますが、それを裏付ける資料は残念ながら見つかっていません。

最初のところで河上資料はたくさん残されていると申上げましたが、こうした詮索をはじめますと、結局はあまりよくわからないということが多いように思いました。

二　『無我の愛』

もうひとつ、やはり年譜の作業のときに感じたことですが、自叙伝のある部分の記述が一体何にもとづいて書かれているのか、ということが気になったことがしばしばございました。つまり自叙伝を執筆したときに手許に置いて参照した材料が何であったのかということです。

無我苑入苑もその一つでした。無我苑との関係は、劇的な宗教体験をして彼の一生を左右することにもなった場でもあるだけに、自叙伝のなかでも相当なスペースが割かれています。「自画像」の冒頭部分（全集続5巻）および「大死一番」（続7巻）はいずれも無我苑のことを扱っています。

ところで、これらのいずれをみましても、当時読売に「社会主義評論」を連載していた河上が、どういうきっかけから無我苑を知り、入苑を決意するまでに至るのか、という点でいまひとつ書き尽くされていないように思います。

「自画像」「大死一番」を読んでみますと、この二篇が拠っている材料は、当人の記憶以外は、どうも専ら未発表の草稿「余が懺悔と余が信念」（3巻所収）であるようです。この草稿は無我苑を袂別した直後に書かれた相当詳細なドキュメントですので、河上が全面的にそれに拠ったのは当然です。

しかし、袂別後ではなく、無我苑入りを決意した正にその時点で執筆した『社会主義評論』の「擱筆の辞」のなかには、自叙伝には書かれていない無我苑との最初のきっかけに触れた一文があります。

「余は「社会主義評論」の批評『無我の愛』第九号に出づると聞き、之を購買して一読したるも、他の記事は通読だもせざりき、しかるに其の次号は脱宗号と題しありしを見て、ものめずらしと思ひつゝ、一部を求めて通読したりき、而して余は一種の感に打たれたりき、故に其の次の号と又次の号とは発行の即日に之を購読したりき、而して余は益々不安を感ずるに至りたり。」（3巻、83頁）

そしてこのあと、11月28日にトルストイの『我宗教』を読んだことが入苑の決定的契機になった、という自叙伝でも語られている話に続いていきます。

河上は自叙伝執筆の際に、どうも自分の著作である『社会主義評論』の方は参照しなかったのではないかという気がいたします。

そう思われますもう一つの理由は、自叙伝には『無我の愛』や『我宗教』を読んだことだけが無我苑入苑の理由として強張されていますが、実は『評論』の連載そのものにも原因があったという面は全く無視されているように思います。『評論』が他の社会主義者の批評でなく、自分で社会主義の理想像を打ち出す段になって、ハタと行きずまってしまったようにみえます。彼は後半の第三十二信以下で「理想としての社会主義」を説きはじめますが、最後にきて、結局は「社会を組織せる各個人の利己心」が大きな弱点となってその理想を阻む、という結論に達し、大きな壁にぶつかってしまったかのようです。そして無我の愛はこの「利己心」の問題を一挙に解決するかのように「錯覚」させた、というように私にはつなげて理解できますが、自叙伝にはこの『評論』との関連はあまり語られていません。

ところで、いま私たちは伊藤証信の主催した機関誌である『無我の愛』をみることができます。河上は自叙伝のなかで、「今私の手許には当時の『無我の愛』が残って居ないから、確かなことは分からないが……」と断わっていますが、もし自叙伝執筆の際に、この雑誌のバックナンバーを参照できていたら、「大死一番」の記述もまたすこし今とは変化があったはずです。

そうしたことを感じさせることの一つは、伊藤の説く無我の愛とトルストイとがどういう結びつきがあったか、という点が、この雑誌をみるとかなりはっきり出ていることです。

自叙伝のなかでは、一方で、『無我の愛』を読んでその考え方に強く魅かれた、と書き、他方では、11月28日

にトルストイの『我宗教』を買って読んだことが無我苑に入る決定的契機となった、と書いています。これは両者の間になにか結びつきがありそうなことは想像させますがあまり具体的にはふれられていません。

『無我の愛』誌を繰ってますと、確かにトルストイのことに触れた伊藤証信の文章が出てきます。しかも河上の書評が載った同じ9号には「日本の「トルストイ」―二宮尊徳翁の無我愛」という伊藤執筆の小篇がありますし、また読者との質疑応答欄に「結婚論」と題し、質問者が「私は『無我の愛』と「トルストイ」伯の『我宗教』と同じ事の様に思ひますが如何でしゃうか。」と問うたのに対し、伊藤は「僕は先づ君がトルストイ翁の『我宗教』を読んで居らるゝと云ふのが気に入った。そして『無我の愛』と『我宗教』との間に、少しも異った処が無いと見られたのは、慥かに卓見だ。」といった記事がみえます。さらに15号には伊藤の「杜翁の『我宗教』を読む」が掲載されており、それをみると伊藤がいかに『我宗教』に傾倒したかがわかります。

「〇余は、一昨年四月、加藤直士氏の和訳によって、始めて、トルストイ翁の『我宗教』を読んだ。

〇当時余は、人生問題に就て、煩悶の頂上に達して居たので、一読して非常なる感動を受けた。

〇余は、四月から八月迄、父の病気を看んが為に郷里に帰って、父と共に起臥して居ったが、其間の仕事は、殆んど『我宗教』の繰読みであったと云ってもよい。

〇二読三読四読五読乃至十数読、其間種々の経過と種々の苦心とを経て、八月下旬に至って一夜意に廓然として大悟したのである。」

このように書いた後に、『我宗教』が従来の宗教書類といかにちがうものであるかという特色を列挙しています。そして終りの方へきて、しかしトルストイも限界があり、無我愛はそれを超えようとしているのだ、といって結んでいます。

『我宗教』という本は明治36年に加藤直士訳で文明堂から出版されますが、伊藤はそれを37年に読み、河上は一年おくれて38年に読み、二人は共にそれに決定的な影響を受けた、ということがわかります。『無我の愛』を眺めていまして、成程河上と伊藤を結びつけたのはトルストイの『我宗教』であったのかと、私は得心がいったような気になりました。

ただ、これは二人の結びつきのきっかけですが、袂別の時にはまた、このトルストイの『我宗教』に対するも

ともとあった筈の理解の相違が表面化した、とも言えるのではないかと思います。しかし、これは大変ややこしそうな問題ですので、専門家の研究を期待したいと思います。

『無我の愛』はごく最近復刻版が不二出版から出て一層見やすくなりましたので、河上の宗教体験や獄中での宗教論に関心のある研究者の方が、河上サイドだけではなく、伊藤の言い分とつき合わせて論じていただければ、また新しい問題も出てくるかもしれないと私は期待しています。

三　『新広島』

明治四三年には『新広島』という旬刊新聞の切抜がたくさん出てまいります。この新聞は河上の義兄にあたる藤田菊太郎が広島で発行したものですが、新聞社勤めの経験のある河上は、藤田から請われて、最初から深く関わったようです。彼は、記事の割付けをはじめ、自分で執筆もし、また京大の同僚や知人に寄稿させています。正宗白鳥（読売時代に同僚）、横井時敬、戸田海市、神戸正雄、間宮英宗、谷本富、山本良吉（京大の事務官）などが次々と登場し、さながら河上の個人編集といった感じすら与えます。この新聞は、現在藤田菊太郎のご長男である正さんのところに第1号から第23号まで残っております。

ところで、この新聞にはほぼ毎号無署名の社説が載っておりますが、そのなかには、河上がほかの雑誌や新聞に発表したものとほぼ同文同内容のものが数点見つかっております。この時期には、一度書いたものをほとんどそのままで他へ転載するということをよくやっております。これらは一応彼の著作とみなして、別巻の著作目録に加えました。

また、昨年のことですが、河上の筆跡になる墨筆原稿が藤田さん宅で三点見つかり、調べてみますと、そのうち二点は『新広島』にそのまま活字になって掲載されている社説であることがわかりました。これらは筆跡から証明されたわけで、全集別巻の「補遺」に収めてあります。

このたび『新広島』のスクラップをつくっておりましたところ、河上と特定できないで残っている社説が九点ありました。それに目を通してみますと、私にはそのいずれも、どうも河上が執筆したのではないか、という感じがしてきました。これらはどれも河上がほかでは書いていない内容のものばかりです。

そのなかの一つだけ「韓国併合について」という社説をご紹介したいと思いますが、これは明治43年9月5日の同紙に掲載されています。その前月の8月22日に日韓条約が調印されて韓国併合が決まり、29日に総督府が設置されていますので、併合の直後に出た社説といえます。

社説は冒頭に韓国併合を讃えて次のように書いています。

「方今吾が国運の発展古へに其の儔なく、先きに台湾を併せ後に樺太を併せ今復韓国を併すに至りぬ、誠に邦家の大慶、吾が国に民たるもの誰か之を欣喜せざらん。」

しかしそれにすぐ続けてまた次のように書いています。

「而かも其の吉報の伝はりてより既に数日を経と雖も、民心頗る沈静にして狂喜の沙汰を聞くこと稀なる、怪むべくんば則ち怪むべきに似たりと雖も、吾輩は却て其の事に依りて吾国運の発展の基礎の極めて健実なるを思ひ、窃に中心の欣喜を禁じ能はざるものなり。」

いま引用したところにはすべて圏点が付されています。そしてこのあとに孟子の「民心の妄りに動かざるもの之を大国民と謂ふを得べし」という言葉をひいて、国民の冷静な対応こそ韓国併合にもまさる慶賀すべきことであると強張して書いています。そして終りの方にいたって次のような文章が出てきます。

「韓国が日本の領土となり韓国民が日本臣民と為れる、今の韓国韓国民にとりては其れが最上の幸運なるべけれど、斯かる運命を以て最上の幸運と為さざるを得ざるに至りしは又彼等にとりて、国として将た国民として実に最上の否運と云ふべし。」

一番最後はまた、天皇と歴代の賢人功臣の徳を頌えて結んでいます。

この社説は、文章全体がなんともまわりくどい表現をしているということを一見して感じさせます。また冒頭と結びには、併合を国家の偉業と頌える文章がきていますが、しかし、この社説の一番強張していることは、日本の領土拡張に対して、民衆がのぼせ上ったりすることなしに冷静に事態の成行きを見ている、それは何にもまして結構なことだ、というところにあるようです。それと共に併合による相手方国家、国民の不幸に控え目ながら言及しているのが目にとまります。

明治四三年という年は、五月に大逆事件の逮捕がはじまって言論がひどく圧迫されていく一方、この韓国併合に象徴されるように、日本のナショナリズムが強力に前

面に押し出されていく時期ですが、河上はこうした情勢をたいへん危険な徴候とみて、この年の暮れから翌四四年にかけて『時勢之変』や「日本独特の国家主義」「政体ト国体」などを相次いで発表して、この流れに警鐘を発します。

また、四四年四月には河上は沖縄調査旅行に出かけますが、現地でおこなった講演が問題となって、沖縄のなかに賛否両論が起り、彼は予定を切上げて早々に帰京します。これは河上の「沖縄舌禍事件」として有名ですが、その問題となった「新時代来る」という講演の一節には次のような言葉があります。

「或は本県人（沖縄県人）を以て忠君愛国の思想に乏しと云ふ　然れどもこは決して歎ず可きにあらず　余は之あるが為めに却って沖縄人に期待する所大なる…」（5巻520頁）

また

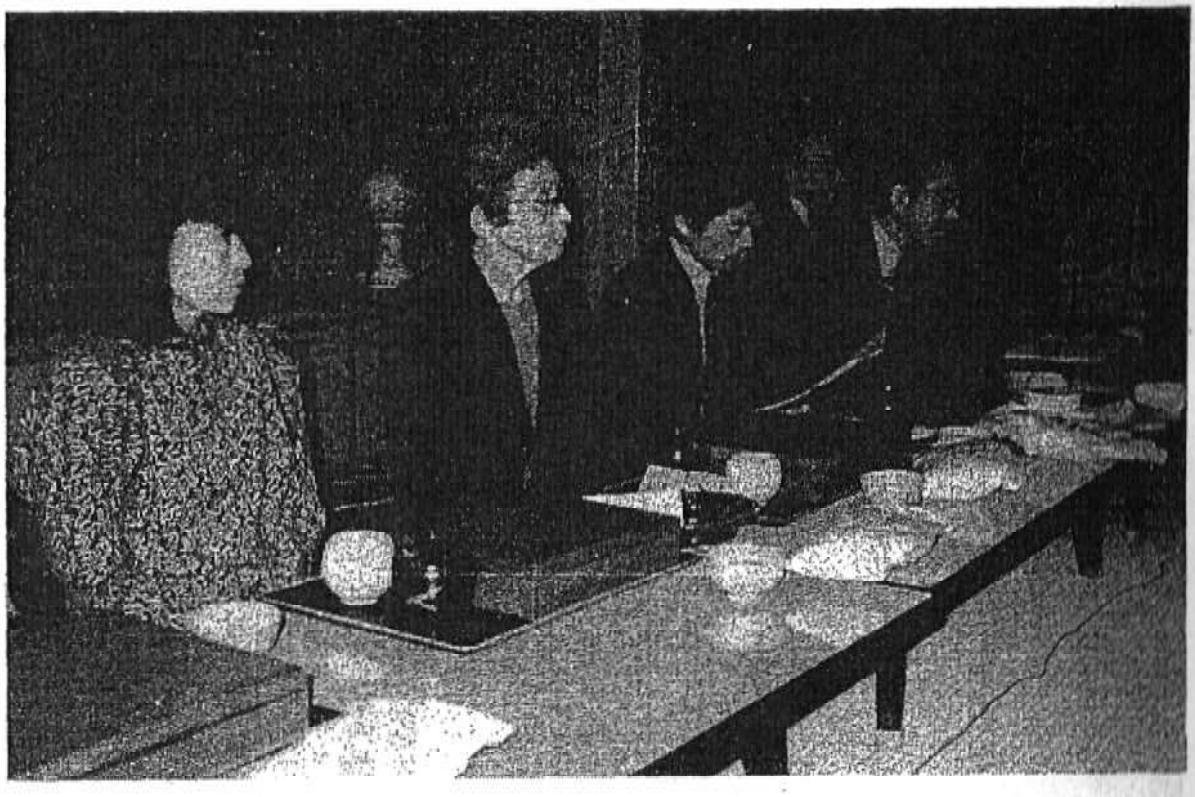
「今日の如く世界に於て最も国家心の盛（？）なる日本の一部に於て国家心の多少薄弱なる地方の存するは最も興味ある事に属す」（同）

いま引用しました部分は、河上の時勢に対する考え方が正直に吐露されたものと思いますが、これが沖縄の一部人士の猛烈な反撥をかう結果になりました。

私は「韓国併合について」を一読したとき、すぐにこの沖縄講演での発言が思い浮かびました。さきの社説が最も強張している「民心頗る沈静」という観察眼は、のちの「日本独特の国家主義」とか沖縄講演などで表明された日本のナショナリズムに対する警戒心と共通の基盤に立っているように思われます。

この「韓国併合について」という社説が、もし河上の執筆にかかわるものであるとしますと、彼の時論のなかでも無視できない論説の一つになりうると思いますが、これが河上のものであるかどうかの判定は、ただ思想的脈らくだけでは当然のことながら不十分です。

全集の刊行前とか刊行中にこうしたものの判定作業ができれば一番よかったのですが、実情は当面の作業に追われてとてもこういうものをゆっくり検討するような余裕がございませんでした。それで、今度の全集の場合は、無署名論文の扱いについては、疑わしいものは採用せず確実なものだけ採用するという方針でとおしました。そのために『新広島』の社説とか『日本経済新誌』の社説のなかで、いくらかのものが懸案として残ることになりました。



無署名論文の判定はたいへん厄介な作業ですが、最近では河上全集に少しおくれて出発した兆民全集がそれをやっております。作業経過をきいていますと気がとおくなるような感じがしますが、そこでは例えば、中国の思想史を研究している方が中心となって、兆民が若い時期に読んだ中国の古典を可能なかぎり辿り、それらのなかから彼が特にどういう接続詞や用語を好んで用いているか、というようなことまで検討されているようです。

河上についても、今度の全集をもとに、残された無署名論文の判定をやって下さる方が出現されることを私は期待しております。

（当日は「新聞にあらわれた河上肇像」と題して、スクラップ記事の紹介を中心にいたしましたが、散漫に流れた上、長時間にわたりましたので、大巾なカットと加筆を行ない、表題も改めました。）

安井功さんを偲ぶ会

塩田庄兵衛

左記の文面の往復はがきを受取られた方も、御案内漏れの方もあったと思われるが、念のために再録する。

「　安井功さんを偲ぶ会御案内

敬愛する安井功さんの突然の死に、驚かされたのは一九八五年春三月の事でした。はや一年余を経ましたが、安井さんを忘れることの出来ない有志が相寄って「偲ぶ会」を催したいと存じます。場所は安井さんにもっとも相応しいと存じ、一寸不便ですが法然院にお願いしました。

日時　一九八六年一一月一二日（水）一一・三〇AM

場所　鹿谷　法然院

会費　四、〇〇〇円

秋たけなわの法然院でご遺族を交えて食事を共にしながら安井さんを偲ぼうではございませんか。ご案内まで。（〆切九日）

一九八六年一〇月三〇日

塩田庄兵衛

岡部伊都子

大門英太郎　発起」

京都観光の名ガイド、個人タクシーの安井功（いさお）さんが、河上肇先生を熱烈に敬愛して、墓守りといってよいような存在であったことはひろく知られていると思う。その安井さんが一九八五年三月二十四日に思いがけない死を遂げられ、それを知って葬儀にかけつけた大門さん（河上肇記念会事務局代表）も私も、安井さんを追悼する催しを実現したいと念じてきた。ようやく大門さんのお世話で、岡部伊都子さんと僭越ながら私が名を列ね、心当りの方々に右の案内状を差上げたという次第であった。

突然のことであり、ウイクデーの昼間のことでもあり、出席されたのは後記する方々にかぎられたが、多数の方から追悼のことばが寄せられた。御遺族は令嬢の浩子さんとその夫君森田茂氏が代表して出席され、法然院の梶田真章法丈も参加して下さった。

大門さんが開会の挨拶をされて、塩田が司会を仰せつかり、床の間に飾った故人のにこやかな笑顔の写真に黙祷を捧げた後、羽村しづ夫人（河上肇先生御長女）を皮切りに渡辺和代（渡辺元治医師夫人）、大橋満子（故大橋隆憲京大教授夫人）、鶴見貞子（評論家俊輔氏夫人）、住谷馨（同志社教授）・祐子夫妻、松村茂（京都民報社長）、小嶋康生（毎日新聞記者）、林辰彦（元読売新聞記者）、山城　（淡交社編集者）、大門寿子夫人、黒田勝子（事務局のお世話）など全員が、つぎつぎに安井さんとの出会い、交際の深まりなどについて思い出を語った。そういえば出席者は互いに初対面のひとも多くて、いわば顔の広かった安井さんに引合わせてもらったような形であったが、したがって故人との接触のありようはさまざまであったが、ありのままの経験を語り合うなかで、にぎやかで率直で、そしてやさしくて淋しい人であった安井さんの懐しい人間像を、みんなが共有していることがくっきりした。ときどき笑い声もおこったが、それがたちまち涙声に変るというありさまであった。

遺族の立場から森田夫妻が涙ながらに謝辞を述べられたが、結びの岡部伊都子さんのお話に、一同はとりわけ深い感動に引きこまれた。ピンと張った勁くてしなやかな絲が、微妙な色彩に輝きながら伸びていくといった趣きの詩のような語りに息をつめて聴きほれながら、私たちの思いが安井さんの魂に届いたにちがいないと感じた。もみじが見ごろの法然院の静寂が、この時間にはいっそう深沈の度を加えた。

室万治、山下孝次郎両氏からはお供えを頂戴した。竹馬の友であった吉田吉太郎（田丸弥店主）、末川清、寿岳章子など当日支障で出席できなかった諸氏、さらに東京の岩波雄二郎、木下順二氏をはじめ多くの方から懇篤な文章が寄せられた。

心のこもったいい追悼会だった、というのが出席者一同の感想であったと私は信ずる。

それからしばらくして私のところに、田村敬男氏からの厚い封書が送られてきた。「このたびは安さんの追悼の会を発起下さった由有難うございました」と書き出し

て、自分は毎日新聞の報道記事を読むまでこの会のことを知らなくて残念至極であった、安さんと自分との交わりはかくかくしかじかの深いものであった、と二〇〇字原稿用紙十八枚を費やして綴り、「霊安らかならん事を祈りつつ」と結ばれた長文であった。私は御案内漏れの不行き届を詫びる書状を送ったが、それからあまり日の経たぬうちに、その田村さんの訃報に接した。大阪朝日新聞の依頼で「田村敬男さんを悼む」文章を作った私は、その中に安井功さんを悼む思いをもあわせて盛りこんだ（十二月二十七日夕刊掲載）。

田村敬男さんを悼む

塩田　庄兵衛

82年の生涯、社会進歩に足跡

不屈の精神力と機略で活躍

ついひと月前ぐらい前に、田村と私とが呼び掛け人になり、敬男（たむら・けいだん）さんから厚い討論を受け取った。「このたびは安さんの追悼の会を開きたい」と書き出して、個人タクシーの安井功さんの思い出を二百字原稿用紙十八枚にわたって綴（つづ）った長文であった。

京都の伝統のシンボルともいうべき河上座、木村博周博士を熱烈に敬慕していた原情熱の名ガイド安さんのことを知るひとは少なくないだろう。このひとの死を悼んで、河上座下の数少ない県伝来門弟本郷さんの発起で、幽部伊都子さんの追悼文集が出版された。

この追悼の記事がまだ濡れないうちに、一昨日もテレビ「山本宣治の死」を企画し、私の印象にも深く残っている。

私にとって田村さんのイメージは、戦前は、谷口弥太郎の名著『日本労働組合運動史』をもって、山本宣治の思い出に結び付いていた。当時の活動家たちが残ひとつわ、塩田先生に二枚しかない貴重な資料のフィルムを貸し、田村さんが思い出を話しながら、田村さんが思い出をしておりましたが、ということ、やがて田村さんが指名されたのであった。

国鉄の敬治的自由、言論の圧迫を過ぎて無産・労農政党に送さんに、「もうこれ以上ようたねんですわ」と言葉を濁らせた。

この書簡はおだやかな筆致を呼んだことを、関西の声からもNHKのプロデューサーからも知らされたが、田村さんにとっては、生涯の記憶であったと察せられる。再放送を山宣の実家、宇治の料亭花屋敷で、いまに病床に伏しておられる庄谷悦治先生（同志社教授）と田村さんとが、一緒に観（み）たことは、私の印象にも深く残っている。

田村さんの社会的ポジションをたかがうことが出来るのである。

資産時代に事故で身体障害者出版人であり、晩年は、京都ライトハウス館長として、盲人福祉事業に貢献された社会福祉事業家である。しかし、そのことを軸として、田村さんの八十二年の生涯が、およそ社会進歩にかかわりきわめて方面の活動と結びついていたことは、（或る生涯と学の軌跡――人の綾りしわが自叙伝」（一九八〇年）。

◇

田村敬男氏は戦前、労農党系組織書記長として山本宣治代議士の労働者の政治など活動、戦後は民主社会主義（自由）の結成や選挙対策に尽力した。

一九八六年総会記

紀平龍雄

十月十九日十時すこし前、法然院に着く。生前、河上肇がとよなく愛したその静寂さは今も変わらず、二十分前のあの四条河原町の喧噪が信じられない。苔むした藁葺きの山門にかかる紅葉は京都の秋の見所のひとつながら、見頃はあと半月先かと考えながら境内に入る。やや曇りがちの、十月中旬にしてはやや肌寒さも覚えさせる気候である。

とりあえず墓前へお参り。私が本日の一番かとの予想は見事に外れ、既に老夫婦が墓前を浄められている。朝のごあいさつをしてお礼を述べる。この日を一年の最大の喜びとして、前日に九州阿蘇の麓から上京された麻生泰一御夫妻である。すこしお手伝いして墓前横の名刺受けから名刺三枚を預かる。山門を潜りぬけて会場に行くと、菊の花束等を用意した細川氏が既に受付の準備を始められている。大久保氏が到着されると準備が急ピッチに捗り、続いて大門氏が受付嬢とともに来られて受付開始。

あちこちで一年ぶり、あるいは二・三年ぶりのあいさつが交わされる頃には杉原世話人代表・本日講演していただく岩波書店の米浜氏・さらに御遺族の羽村静子・鈴木洵子さんらも見えられ、総勢五十数名。

定刻十一時、本堂で法要が営まれ、墓前に全員で献花。会場へ戻って昼食。事務局はあれこれ多忙で、毎年会員山下氏から贈られる般若湯の手配は慣れた手付きで毎日新聞小島氏が進められ、やや冷えた参会者の体も暖まり、心も和んで会話がはずむ。

会食後一時すこし前にいよいよ総会開始。司会は例によって大久保氏の流暢な臨機応変の手綱さばきで進行。まず大門事務局長より最近の記念会の状況（とくに会費納入状況の改善ぶり）や会員消息の紹介。続いて杉原四

郎代表からこの一年間の記念会活動報告がなされ、とくに没後四十年記念集会の熱気と全集完結についての感謝と同慶の意思表示がありました。

先生の講師紹介で全員待望の米浜泰英氏の「新聞にあらわれた河上肇像」の講演が始まりました。資料が多く、従って語るべきこと多く、取捨選択に随分とご苦労なされたご様子で、今日のためにさぞ時間を割かれたろうと拝察しました。明治時代に多くの時間を当てられ、大正・昭和にまではすこし時間が足りなかったようですが、これで私達にはまた将来の楽しみが残されました。別の折に改めて今日の続編を聞かせていただきたいと思いました。

この頃、法然院の小僧さんが大きなダンボールを会場へ運んで下さった。中からは実に見事な林檎の山。会員両角康則氏が総会のために信州立科から送って下さったもの。また山下氏からの進々堂のパンもおやつに配られた頃に会員のスピーチに移った。時間の関係もあり今年は事務局の裁量で総会初参加者・遠来の方・今年ぜひ話を伺いたい方等、約十五名のスピーチがありました。また法然院からは「思想の科学」一九八六年九月号より抜刷の阿満利麿著「橋本峰雄論」が全員に配布されました。

三時終了予定がかなり延長して四時近く、法然院の障子にさす陽の光も弱まった頃に無事散会。参会者のかばんは本日配布の各種資料の他に、林檎やパンで膨らみ、こもごもの思いを胸に帰路につきました。

（講演記録は講師のチェックを得、「河上肇資料整理余話」と加筆・改題され、本誌掲載しました。なお、出席者のスピーチは次号に掲載します。）

編集後記

今年は会報を年四回刊行にしたいと思います。

本号は昨年秋の総会特集の（Ⅰ）に当るものとして、講演と総会記を載せました。次号はその（Ⅱ）として出席者のスピーチと会員通信、加えて河上著作の中国語訳の目録を掲載し、四月下旬にはおとどけしたいと思っています。つづいて七月、一〇月と刊行できれば念願の季刊となります。一カ月前を締切とし、原則として紙幅四百字詰、十枚程度、是非ご投稿をお願い申し上げます。

（細川　記）

生誕一一〇年記念事業アンケートについて

一九八九年十月後約一、一〇〇日で河上肇生誕一一〇年を迎えます。今年の没後四十年、全集完結記念の集りは盛会でしたが、二〇代、三〇代の参加者はすくなかった。若い会員をどうして増やすかは繰返し問題として提起されながら、問題提起に止って来た。この事態にいかに対処するか？　まず、総会ご出席の方々のご意見を伺い、ご提案を得たいと存じます。

アンケート

1. 生誕一一〇年記念事業を企画すべきか？
　企画すべし　その他
　企画不要

2. 生誕一一〇年記念事業は若者へのアッピールを中心することに賛成ですか？
　賛成する　その他
　不賛成である

3. あなたは生誕一一〇年記念事業を応援し参加する気持をお持ちですか？
　応援参加する
　断る　その他

4. 若い世代へのアッピール方法として、あなたはどんな方法を思いつかれますか？
　(イ)
　(ロ)
　(ハ)

お名前

別紙の如きアンケートを一九八六年一〇月一九日の総会に配布し回答を得ました。回答率　六七パーセント。

1. 生誕一一〇年記念事業を企画すべきか？
　企画すべし（全員一致）

2. 生誕一一〇年記念事業に若者へのアッピールを中心とすることに賛成ですか？
　賛成する。（全員一致）

3. あなたは生誕一一〇年記念事業を応援し参加する気持をお持ちですか？
　応援参加する（ほゞ全員）　それ以外の回答は、〝出来ることはする。〟〝応援の気持はあるが、それまで生きているかどうかわからない。〟

4. 若い世代へのアッピール方法として、あなたはどんな方法を思いつかれますか？

(i) 新聞の案内欄を利用してPRする。

(ii) 参加者に当日記念会加入用紙を配布して会員を募る。

(iii) 会員に会員住所録を配り、総会後の横のつながりを作る。

(iv) 大学、高校の先生方に積極的に勧誘していたゞく。

(v) 自叙伝を読んでもらうこと。

(vi) 若者自身に河上肇を語ってもらうような企画を考える。

(vii) 自分の子や孫に先生の話をし、著書を読んでやったりする。

事後冗語。

記念会を若々しくして、発展させようという熱意を感じました。甲論乙駁しつゝも、ダイナミックに行動を起す必要を感じると共に、会員の方々の熱烈参加をお願いしたい。

（事務局）

一九八六年収支報告

'八五年、河上肇記念会の財政は健全化されましたが、'八六年は河上肇没後四〇周年、河上肇全集完結記念の集いを京都、大阪で開催しましたので、若干の赤字となりました。記念会を発展させ、永続させる努力は、財政にもその影響を迂余曲折として落とすこと、必然というべきでしょうか？

（大久保雅摂）

収支（'八六、一、一～'八六、一二、三一）

前期より繰越	七六〇、八六〇円
収　入	一、五一二、四五〇円
支　出	
会報費	一、五〇一、〇〇〇円
普及事業費	八四六、八〇〇円
次期へ繰越	△　七四、四九〇円

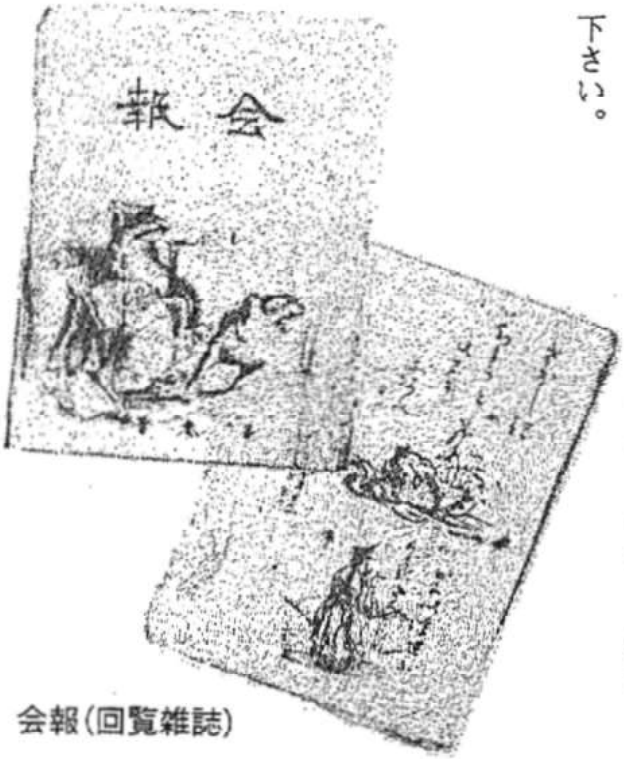
（但し次期への繰越欠損金は大門英太郎氏立替払。）

一九八七年会費の納入を同封振替用紙にてお願い申し上げます。

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報（回覧雑誌）

河上肇記念会
会　　則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。

会費は年額三〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒五四二　大阪市南区島ノ内一―二〇―一九
（丸善石油ビル）　千代田商事株式会社内
河上肇記念会

貧乏物語　初版

〒 542
大阪市南区島ノ内一―二〇―一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年 創刊　只今50号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（74～84才）が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A5版 120頁 頒価 500円 〒200円

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24
児玉　誠方
電話　京都（075）811－7646番
振替　京都　2－15653番